

カタクチイワシ及びブリの資源管理について

カタクチイワシの資源・漁業 及び資源管理について



平成25年2月
水産庁

資料の構成

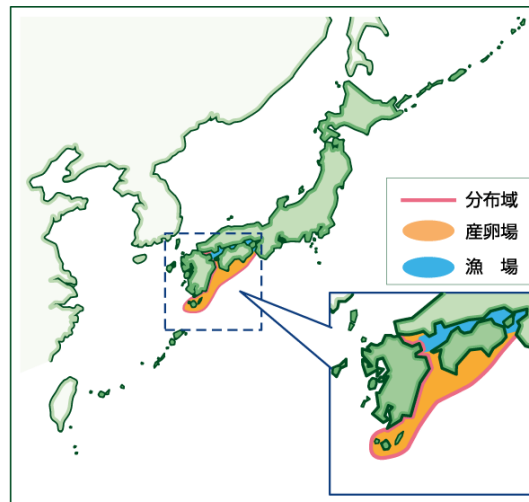
1. 生態等
2. 漁獲の状況
3. 資源の動向
4. 資源管理の現状
5. まとめ

1. カタクチイワシの生物学的特性・分布・系群

系群分類:	太平洋系群、瀬戸内海系群、対馬暖流系群に分けられる
寿命:	2～4歳
成熟開始年齢:	瀬戸内海系群は5カ月(55%)、6カ月(80%)、7カ月(95%)、8カ月以上(100%)、いずれの系群も1歳で100%
産卵期:	厳冬期除くほぼ周年
食性:	カイアシ類を中心とした動物プランクトン
捕食者:	サワラ、スズキ、サバ類、タチウオなどの魚食性魚類、鯨類
分布域・産卵場:	



太平洋系群の分布域



瀬戸内海系群の分布域



対馬暖流系群の分布域

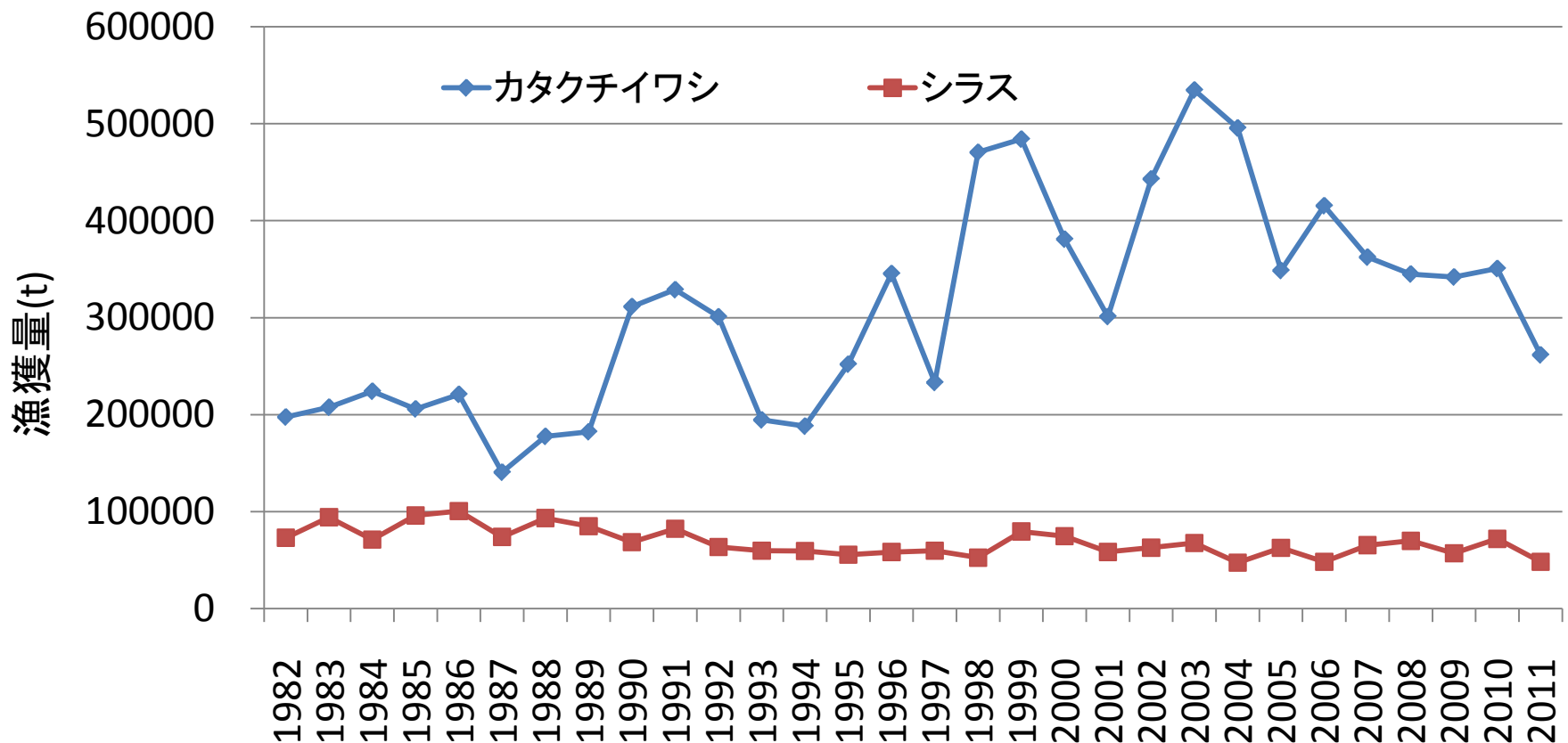
2-1. カタクチイワシ・シラスの漁獲量推移

○カタクチイワシは成魚のほか、シラスでも漁獲されている。

○カタクチイワシの漁獲量は次第に増加し、近年概ね30～50万トンで推移。

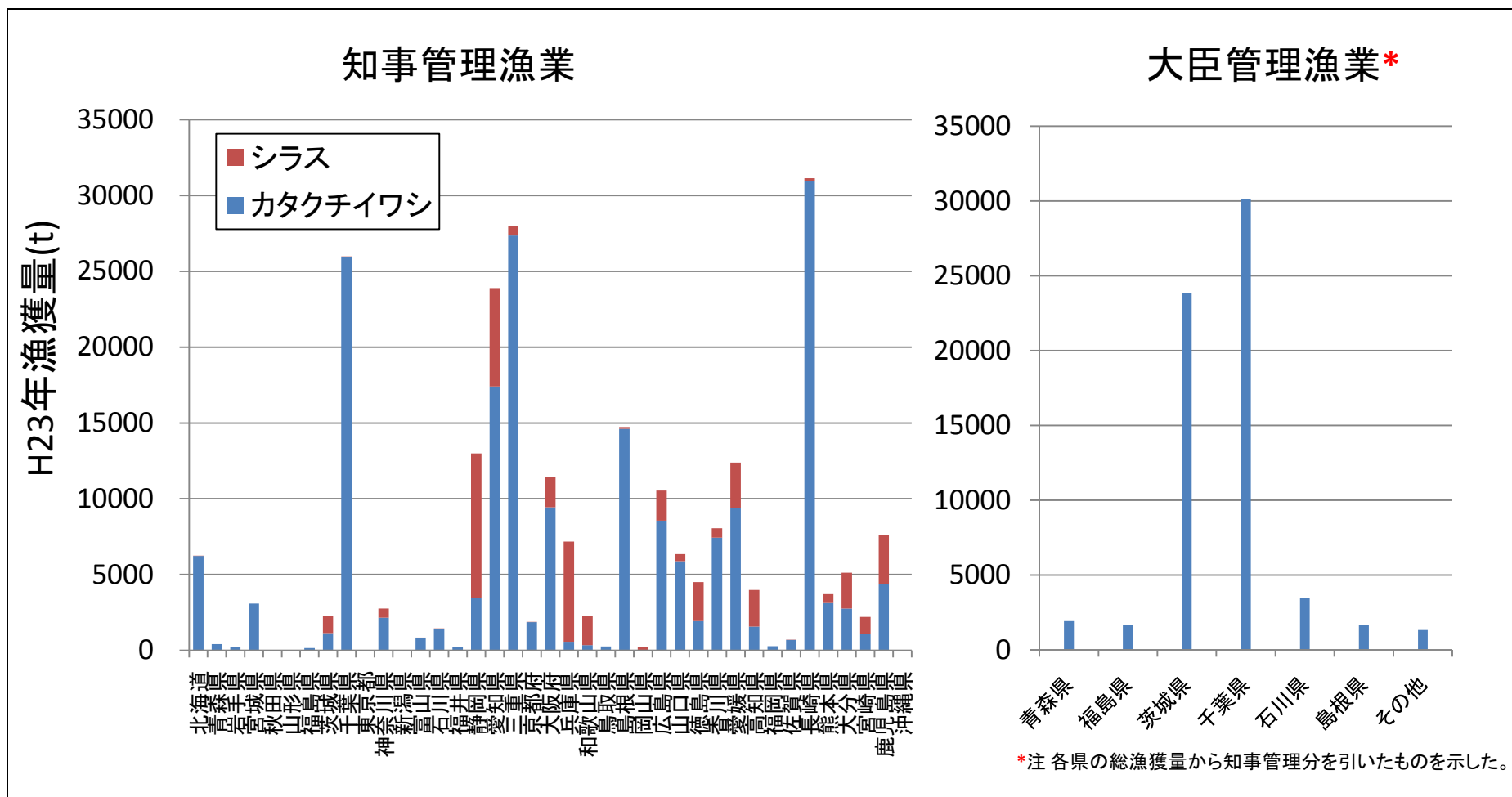
○シラスは6万トン前後で概ね安定。

○シラスの漁獲にはカタクチイワシ以外の稚仔魚も含まれるが、
現在はその殆どがカタクチイワシのもの。



2-2. カタクチイワシとシラスの漁獲状況

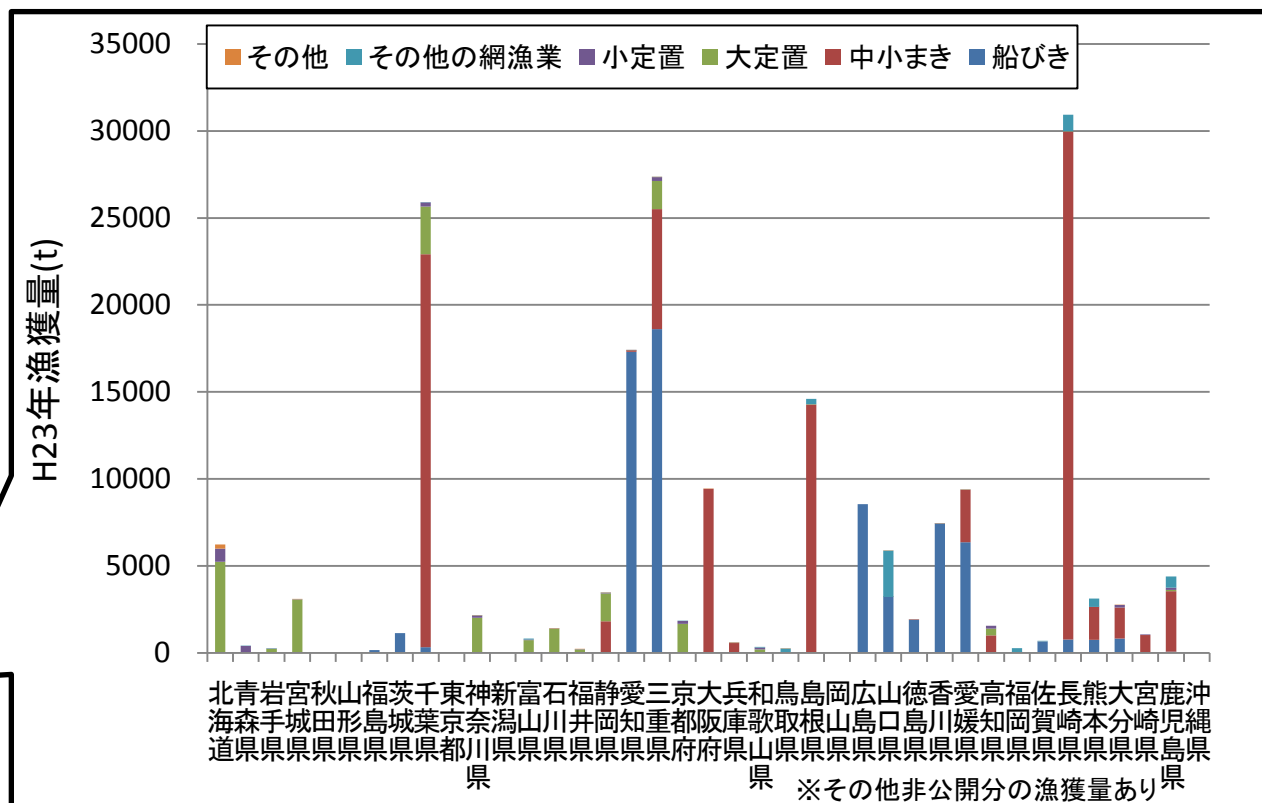
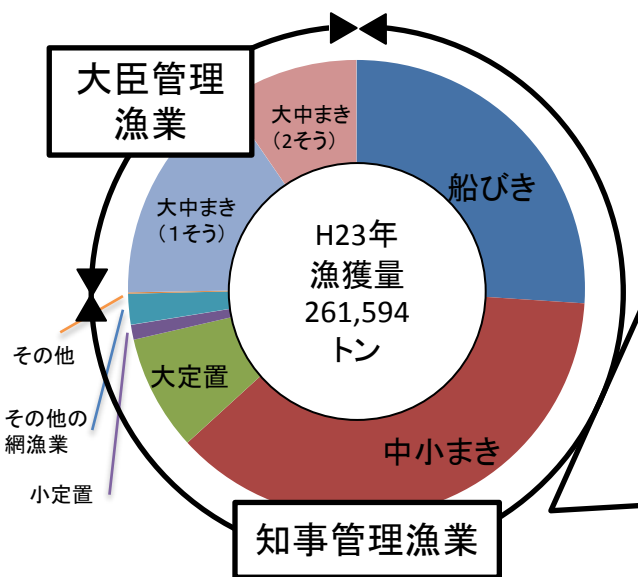
- 知事管理漁業においては、県により漁獲の大半がカタクチイワシであるものから、大半がシラスであるものまで、状況が大きく異なる。



2-3. カタクチイワシを漁獲する漁業

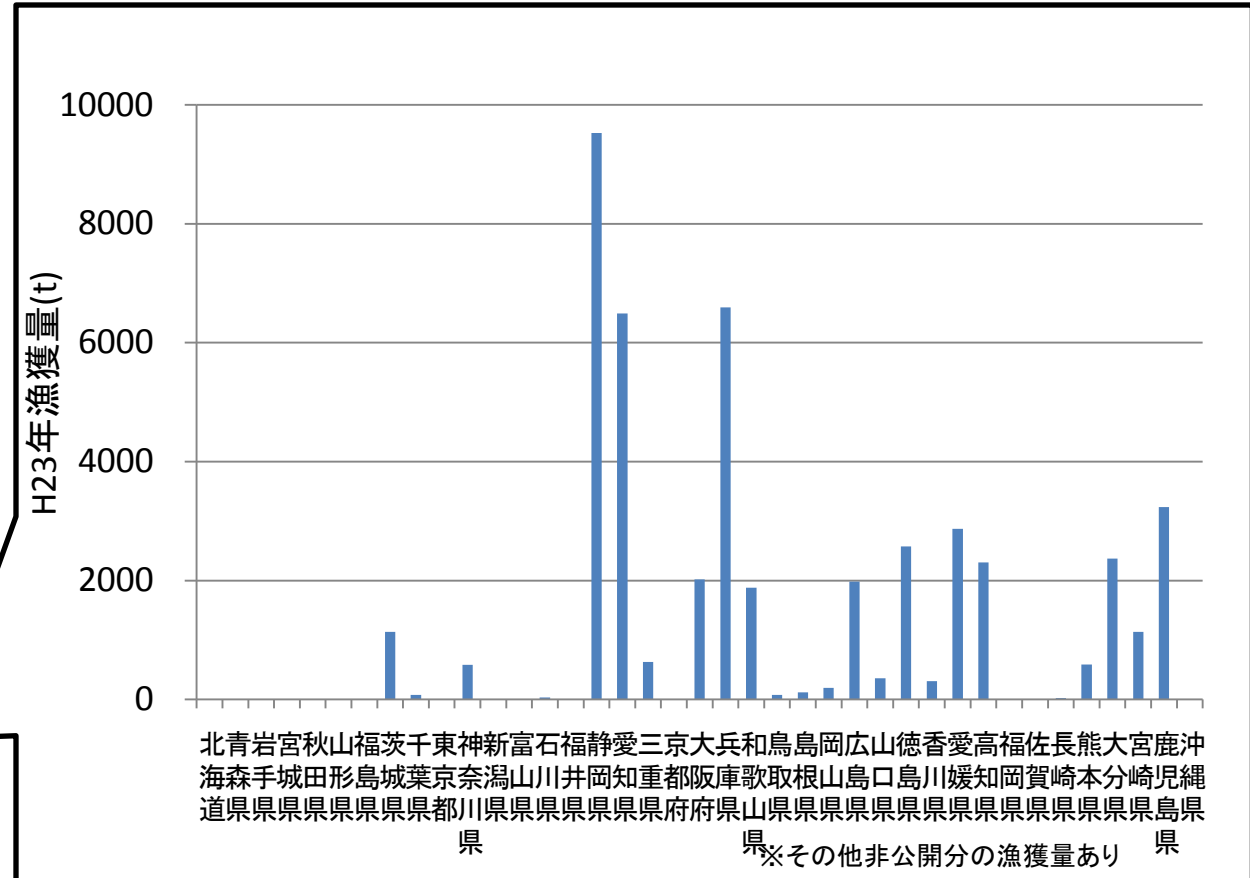
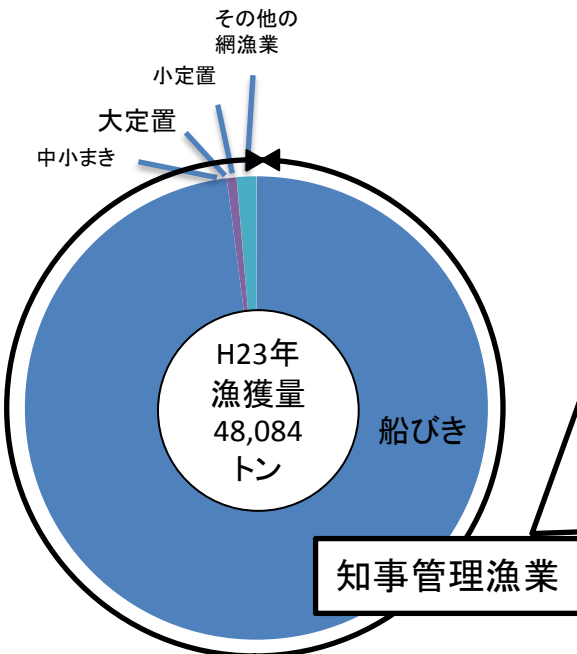
○カタクチイワシ(シラスを除く)の生産量の75%が知事管理漁業によって漁獲されている。

○カタクチイワシを漁獲する漁業種類は、大臣管理漁業では大中型まき網漁業、知事管理漁業では、船びき網漁業、中小型まき網漁業、大型定置網漁業、小型定置網漁業等である。



2-4. シラスを漁獲する漁業

○シラスの生産量の全てが知事管理漁業によって漁獲されており、その大半が船びき網漁業によるものである。



(参考)カタクチイワシの利用

○ カタクチイワシは、さまざまなサイズが多様な形態で利用されている。カタクチイワシの加工品は、いずれも国民生活になじみ深い食材であり、地域においても重要な産物である。

サイズ		食用						
名称	体長 (cm)	シラス	田作り	煮干し	味醂干し ゴマ漬け	丸干し (目刺し)	生鮮	生餌
大ゴボウセグロ	13-15					↕	↕	↕
ゴボウセグロ	12-13			↕	↕	↕	↕	↕
中ゴボウセグロ	10-12			↕	↕	↕		↕
中セグロ	9-10			↕	↕			↕
ジャミセグロ	6-9		↕	↕				
カエリ	5			↕				
シラス		↕						

出典：(独)水産総合研究センター資料を一部改変

○ カタクチイワシ加工品等の生産量の多い都道府県

煮干し品 しらす干し	素干し品*	煮干し品*	塩干品*	生鮮食品向け**	養殖用又は漁業用 餌料向け**
静岡県	山口県	長崎県	千葉県	千葉県	千葉県
和歌山県	大分県	愛媛県	大分県	鳥取県	鳥取県
兵庫県	千葉県	熊本県	高知県	北海道	宮城県
愛知県	鳥取県	千葉県	鹿児島県	宮城県	鹿児島県
愛媛県	静岡県	香川県	島根県	鹿児島県	京都府

出典：平成21年度水産物流通統計年報 より作成

注. *はいわし加工品の生産量の上位県を、**はかたくちいわし(生鮮)の「生鮮食品向け」及び「養殖用又は漁業用餌料向け」の仕向けが多い漁港の所在道府県を記載。

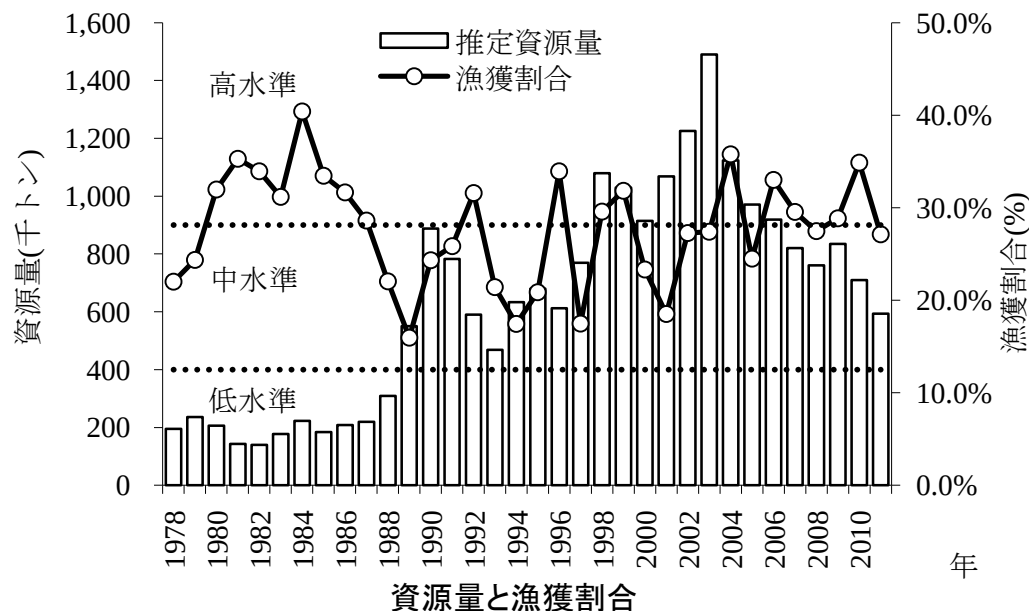
3-1. カタクチイワシの資源動向等(太平洋系群)

○ 水準・動向等

- ・水準は中位。近年の資源量の推移から動向は減少。

○ 資源の特性

- ・最も資源規模の大きな系群。他の系群に比べ海洋環境の影響により大きく変動。



○ 漁獲との関係

- ・代表的な漁業種類は、大中型まき網(常磐、房総)、船びき網(福島から鹿児島沿岸) 定置網(各地)、中小まき網(各地) 等。
- ・現在の漁獲圧は高くなく、親魚量を望ましい水準以下にってしまうリスクは小さい。
- ・シラス漁獲量と0歳魚資源量に関係はみられずシラス漁業が資源に与える影響は小さい。

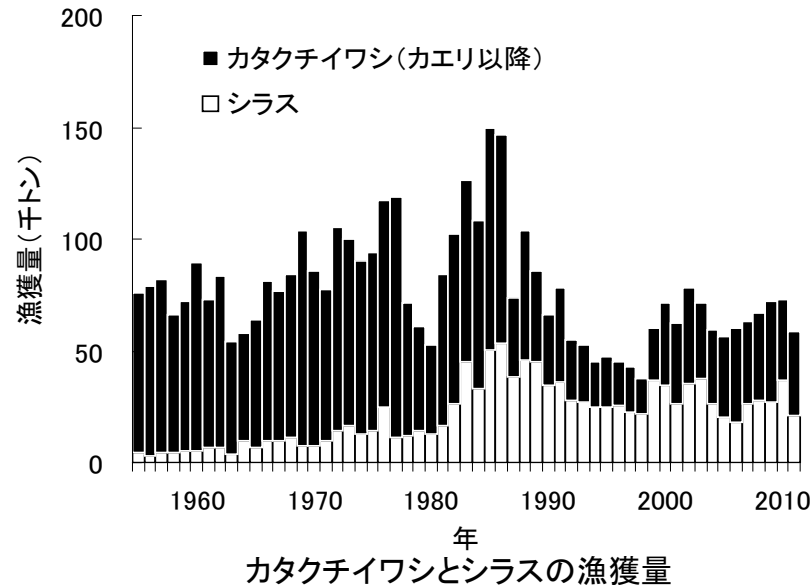
3-2. カタクチイワシの資源動向等(瀬戸内海系群)

○ 水準・動向等

- ・水準は中位。近年の資源量の推移から動向は横ばい。

○ 資源の特性

- ・瀬戸内海における再生産と春期に太平洋から来遊するシラスによって資源が維持されている。



○ 漁獲との関係

- ・代表的な漁業種類は、中型まき網、船びき網等。
- ・資源に対する漁獲の影響が大きい。
- ・シラスを含め各サイズが漁獲対象となっており、同じ漁獲量であっても、どのようなサイズで漁獲されたかによって資源への影響は異なる。
- ・シラスの漁獲量が多いことから、シラスを含めた漁獲管理が重要。

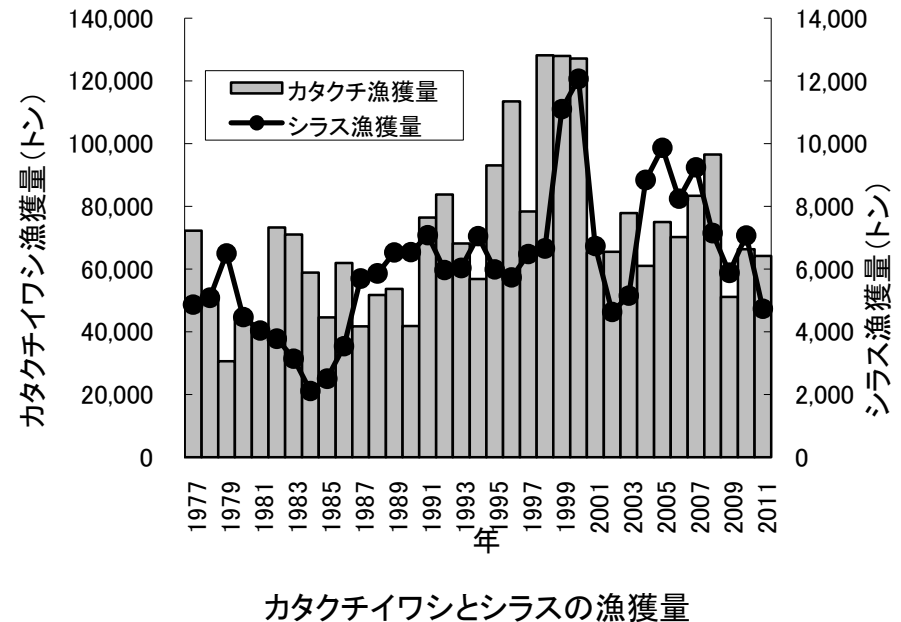
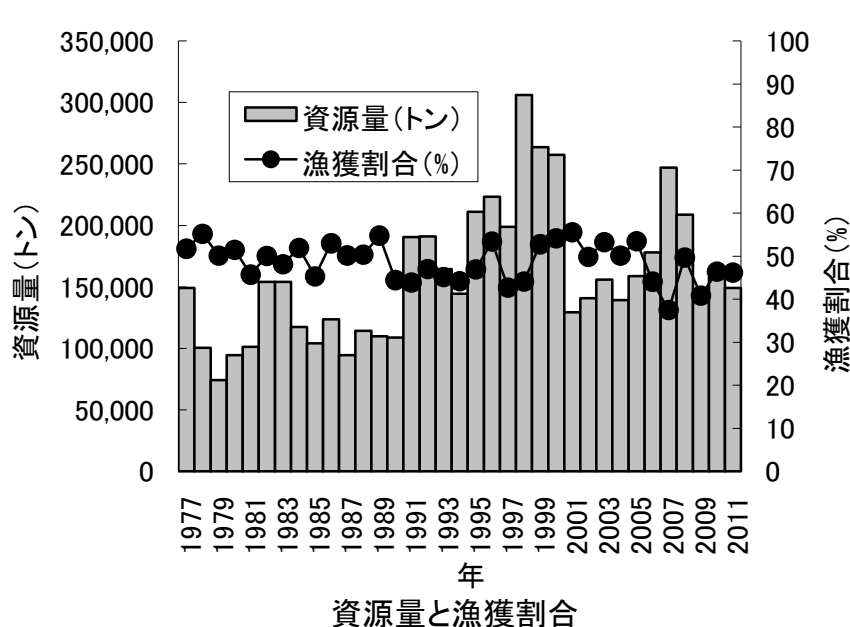
3-3. カタクチイワシの資源動向等(対馬暖流系群)

○ 水準・動向等

- ・水準は中位。資源量の推移から動向は減少。

○ 資源の特性

- ・海洋環境の影響を受けるが、最も資源状態が安定している系群。

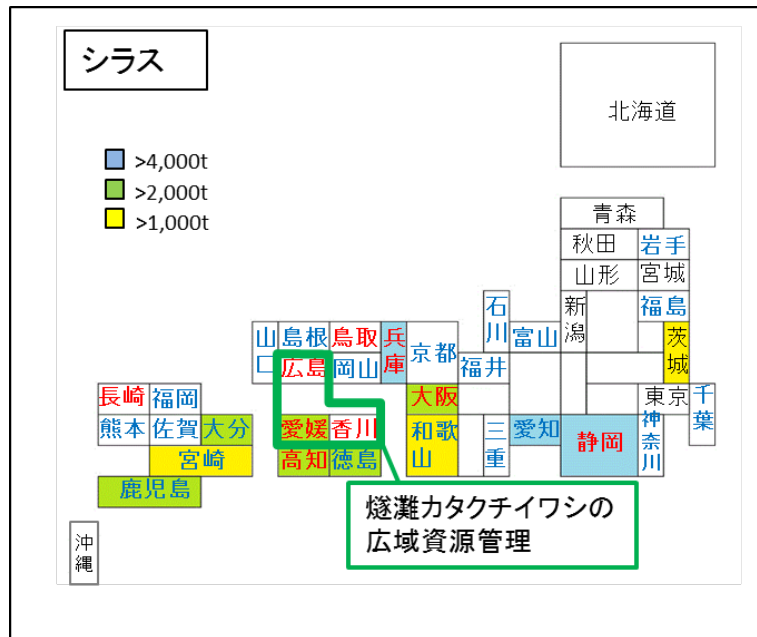
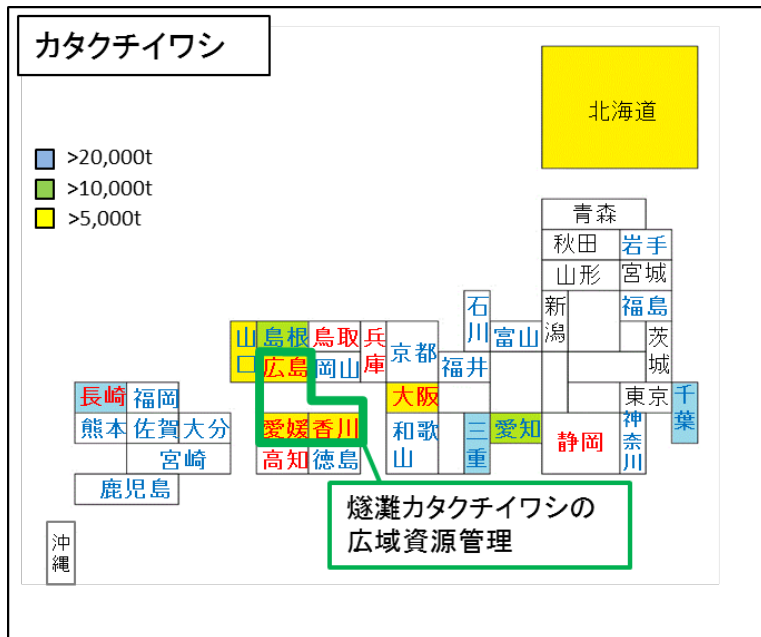


○ 漁獲との関係

- ・代表的な漁業種類は、定置網(日本海北部、西部)、大中型まき網(日本海西部、東シナ海)、定置網(日本海西部)等。
- ・資源に対する漁獲の影響は小さいものの、漁獲割合はほぼ一定であり、資源量に応じた漁獲が維持されている。
- ・シラスの漁獲が資源に与える影響は瀬戸内海系群に比べると小さい。

4-1. カタクチイワシの資源管理の取組み状況①

- 国の資源管理指針:カタクチイワシの資源管理について定めていない。
- 都道府県の資源管理指針:漁獲のある34道府県のうち、カタクチイワシを魚種別資源管理の対象としているのは、静岡県、大阪府など9府県。漁業種別資源管理の対象としているのは、岩手県、福島県など22府県。



資源管理指針に
定められた管理
措置

定置網

作業期間制限

休漁設定

漁具制限

操業時間制限

作業日数制限

船びき網

休漁設定

操業区域制限

漁具制限

まき網

休漁設定

図中の色は、漁獲量の水準を示す

都道府県が定めた資源管理指針においてカタクチイワシ若しくはシラスを管理の対象としている場合、**赤字**、漁業種類別資源管理の対象としている場合、**青字**で表示。

- 瀬戸内海系群においては、広島県、香川県、愛媛県が連携してカタクチイワシの広域資源管理の取組みを実施。

4-2. カタクチイワシの資源管理の取組み状況②

燧灘カタクチイワシの広域資源管理

- 参加県 : 広島県、香川県、愛媛県
- 漁業種類: 瀬戸内海機船船びき網、いわし機船船びき網漁業
- 取組内容: 「カタクチイワシ 瀬戸内海系群(燧灘)資源回復計画」の内容に引き続き取り組み。

○資源回復計画の内容

- ・目標: 漁獲圧力が高い瀬戸内海系群カタクチイワシについて、資源水準を平成12年～16年の初期尾数の平均346億尾と同程度に維持する。

・資源管理措置の内容

a. 休漁期間の設定

瀬戸内海機船船びき網漁業: カタクチイワシの産卵状況をふまえた関係者の協議による操業開始日及び終漁日の設定

いわし機船船びき網漁業: 操業期間制限

(4月1日～5月31日、11月22日～翌年3月31日)

b. 定期休漁日の設定

- 各県水産試験場、(独)水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所、瀬戸内海漁業調整事務所で構成された「燧灘資源管理検討会」により取組を支援。

- 平成17年～平成23年の資源回復計画の期間において、平成16年以前に比べて平均1割の漁獲割合の削減を実現。

5. これまでのまとめ

- カタクチイワシは全国各地で多様な漁業種類によって、シラスから成魚まで、様々なサイズが漁獲対象となっている。
- 対馬暖流・瀬戸内海・太平洋の3つの系群は、それぞれ資源や漁獲の状況が異なる。

太平洋 : シラス、カタクチイワシとも漁獲が資源に与えている影響は小さく、現時点で特段の管理を要さない。

瀬戸内海 : 漁獲の影響が大きく、シラスを含めた管理が重要。特にシラスの管理が重要。

対馬暖流 : 資源に対する漁獲の影響は小さいものの、漁獲割合はほぼ一定であり、これまでのところ資源量に応じた漁獲が維持されている。

- 対馬暖流・瀬戸内海系群は同じ数量を漁獲したとしても、どのようなサイズで漁獲されたかにより資源への影響は異なる。
- 漁獲による影響が大きい瀬戸内海においては、一部海域(燧灘)において、広域的な資源管理の取組みが実施されている。

ブリの資源・漁業及び 資源管理について



平成25年2月
水産庁

資料の構成

1. 生態等
2. 漁獲の状況
3. 資源の動向
4. 資源管理の現状
5. まとめ

1-1. ブリの生物学的特性

寿命:	7歳前後
成熟開始年齢:	3歳 (一部)、4歳 (100%) (1月を誕生月とする)
産卵期・産卵場:	冬～初夏 (1～7月)、東シナ海の陸棚縁辺部を中心として、九州沿岸から日本海側では能登半島周辺以西、太平洋側では伊豆諸島以西
索餌期・索餌場:	夏～秋季、九州沿岸～北海道沿岸の東シナ海、日本海および太平洋
食性:	仔稚魚は動物プランクトン、未成魚以降はイワシ類、アジ類などの浮魚類の他、底魚類
捕食者:	流れ藻に付随する時期には共食いをすることがある

1-2. ブリの分布・系群

○ 分布

- ・流れ藻につく稚魚(モジャコ)は、3~4月 に薩南海域に出現し、4~5月には九州西岸から長崎県五島列島近海および日向灘から熊野灘に、6月には島根県隠岐周辺海域に多く分布する。
- ・幼魚から親魚は、九州沿岸から北日本沿岸まで広く分布する。
- ・成魚は産卵のため、冬から春に南下回遊する。
- ・対馬暖流域では成魚の回遊パターンとして、北部往復型(北海道沿岸と東シナ海の間を往復回遊)、中・西部往復型(能登半島以西の日本海と東シナ海の間を往復回遊)が確認されている。
- ・太平洋では、遠州灘-四国南西岸回遊群、紀伊水道-薩南回遊群、豊後水道-薩南回遊群のようにいくつかの小規模の回遊群が観察されている。

○ 系群

- ・系群は全国で一つと考えられる。
- ・東シナ海中南部が最も大きく早い産卵場であり、そこで生まれた仔稚魚が太平洋側と日本海側に配分される。
- ・それぞれの海域にも産卵場はある。
- ・津軽海峡を通じた交流もある。

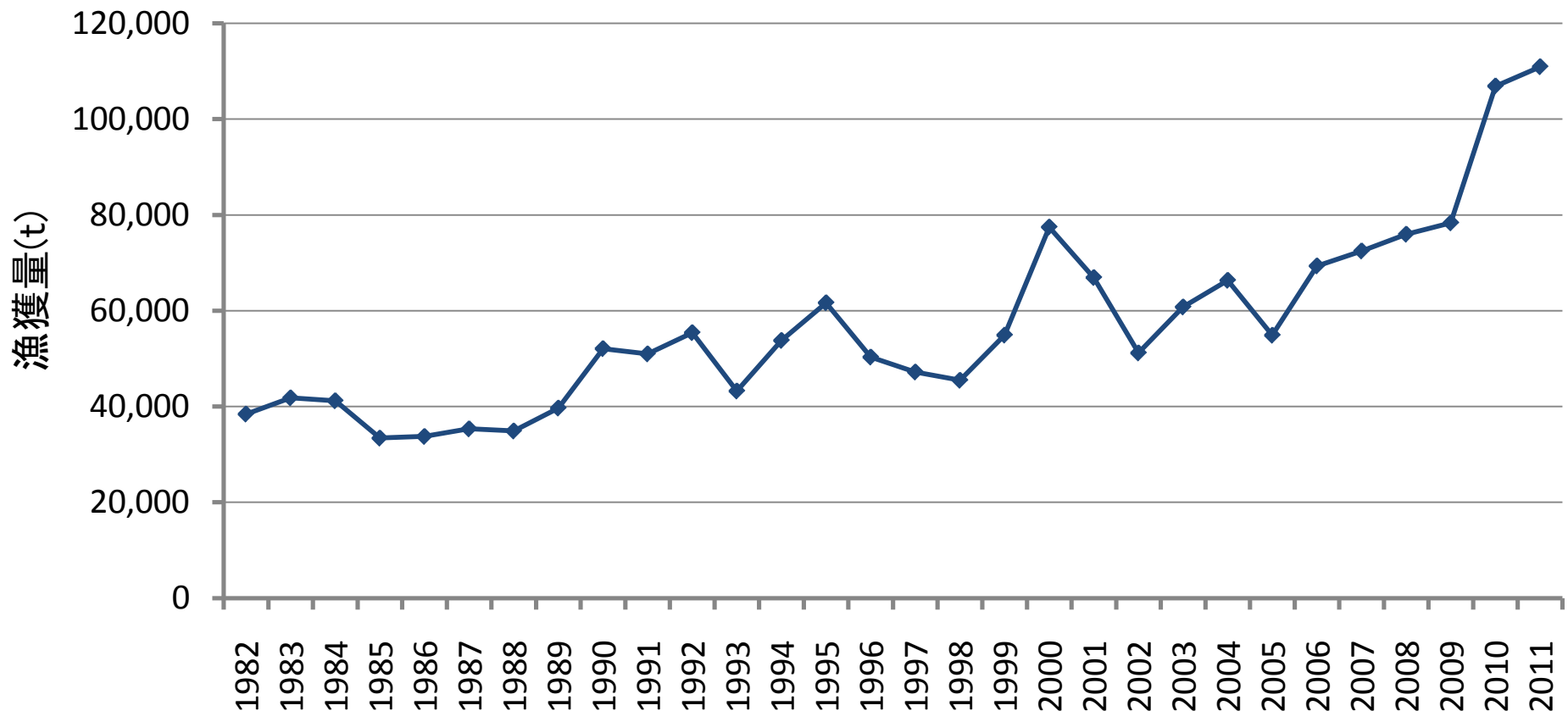


分布域

2-1. ブリ類の漁獲量推移

○ ブリ類の漁獲量は増加傾向にあり、2011年で110,917tとなっている。

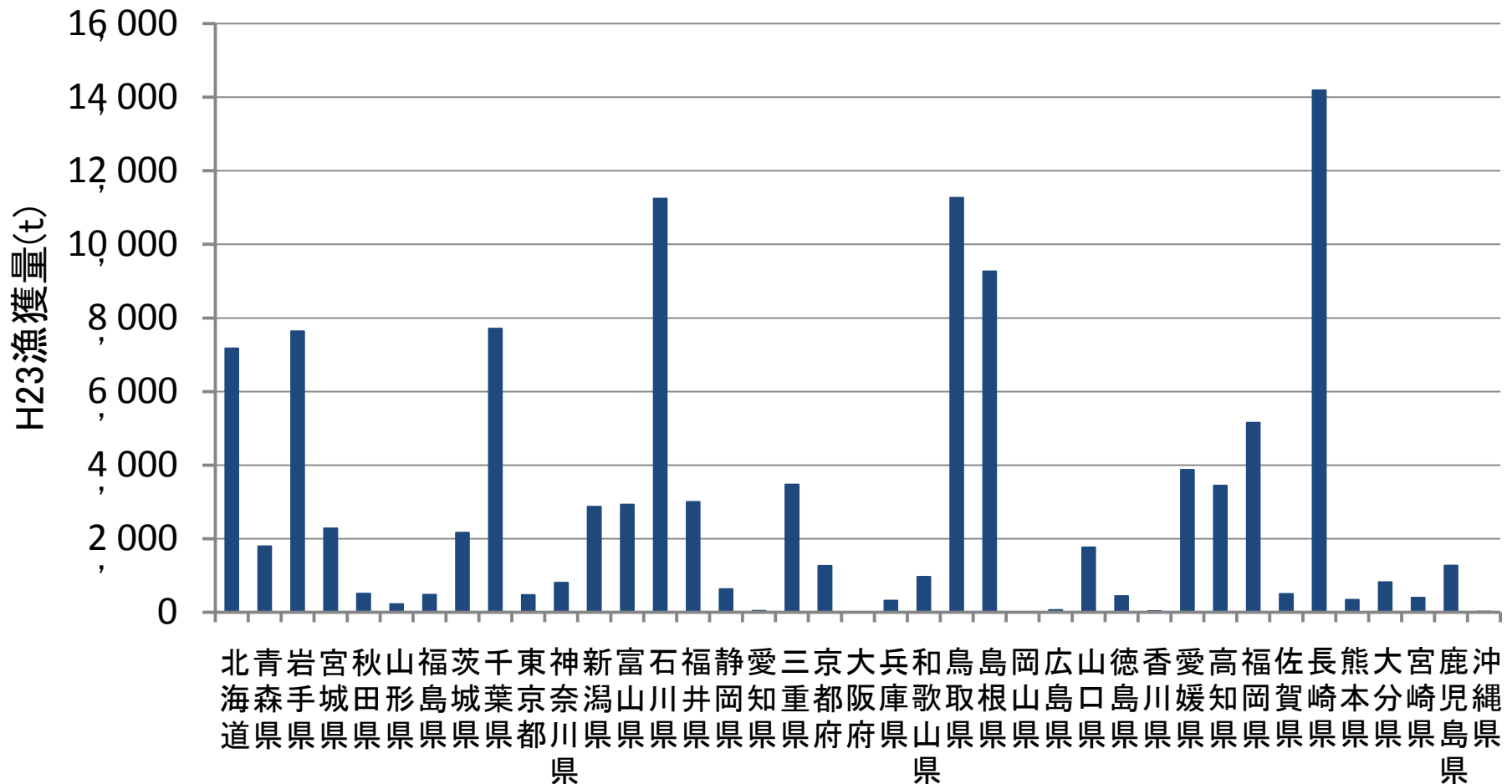
○ ブリ類にはカンパチ、ヒラマサも含まれるが、その多くがブリとされる。



2-2. ブリ類の都道府県別漁獲量

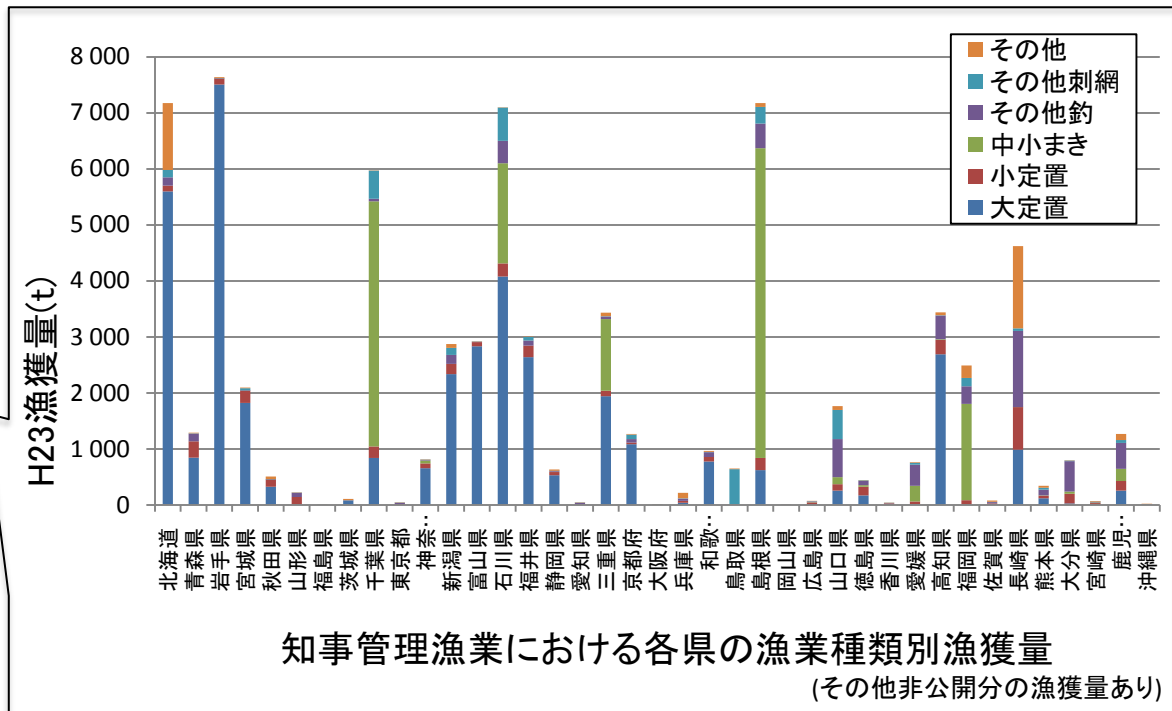
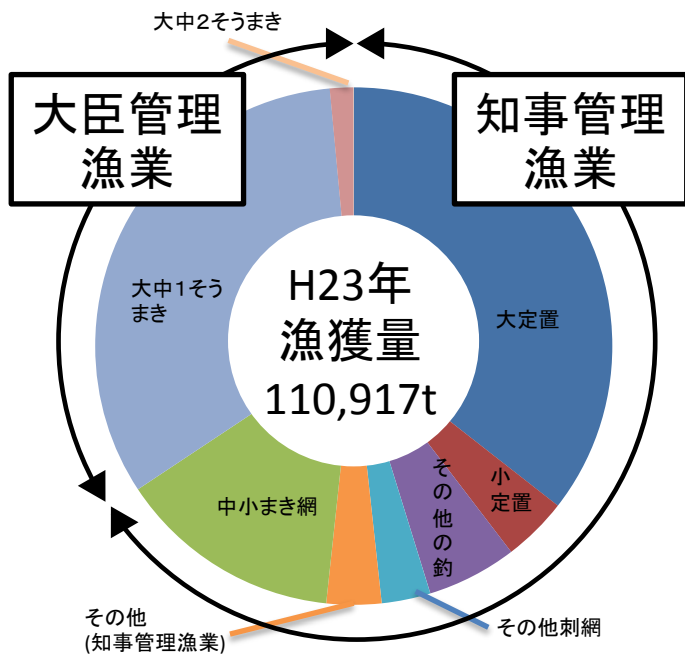
○ ブリ類は九州から北海道まで39都道府県において漁獲される。

○ 日本海、太平洋両方の海域で漁獲されている。



2-3. ブリ類を漁獲する漁業①

- ブリを漁獲する漁業種類は、大臣管理漁業では大中型まき網、知事管理漁業では、大型定置網、中小型まき網、釣り、小型定置網等である。
- 数量管理がしにくい定置網漁業による漁獲が40%を占める。
- ブリ類を漁獲する主要県のうち、北海道、岩手県、新潟県、富山県等は、漁獲の大半が定置網によるものである。

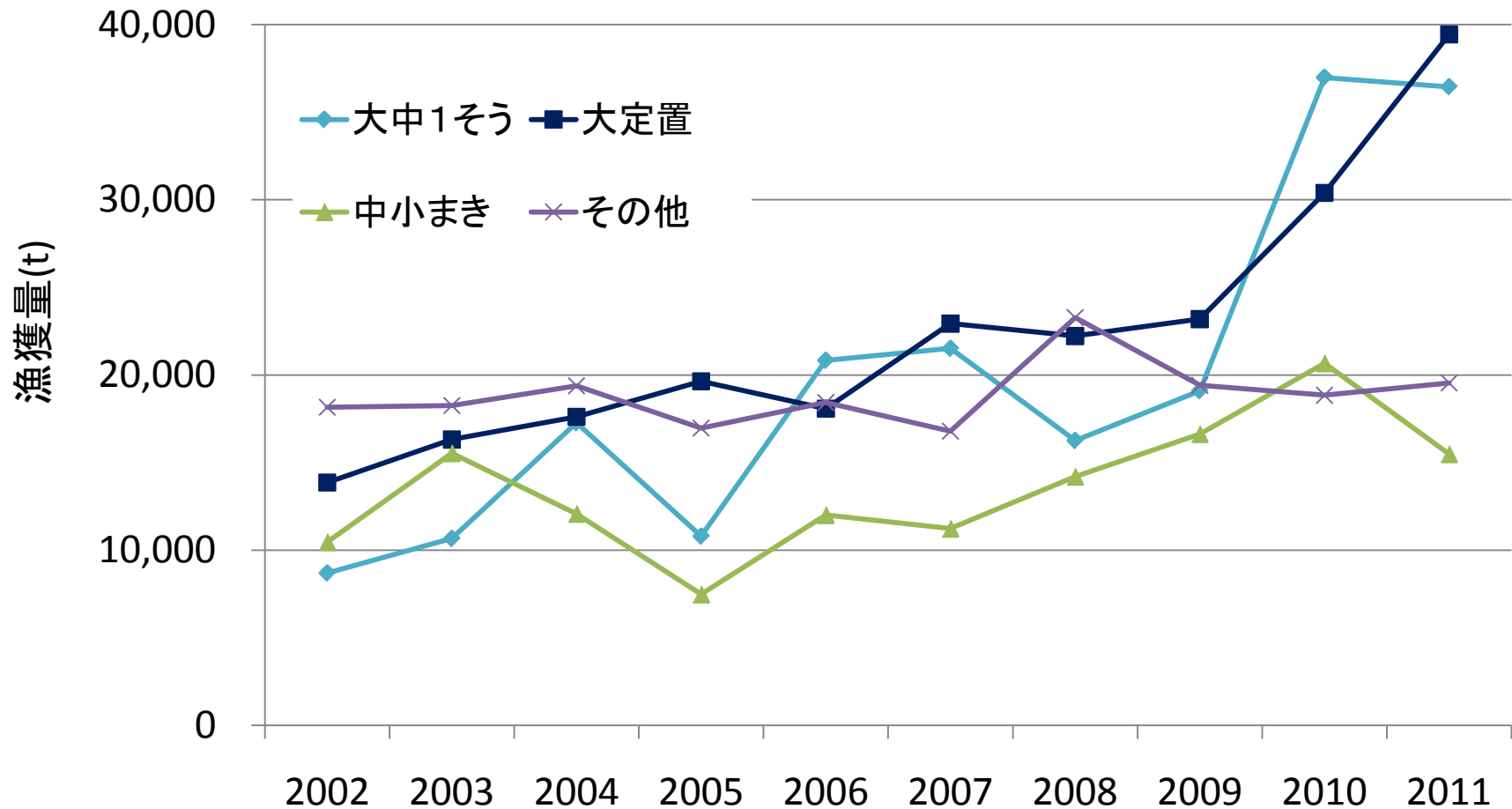


(参考)H23年における主要魚種の定置網漁業での漁獲割合(%)

	マイワシ	サバ類	マアジ	サンマ	スケウダラ	スルメイカ	カタクチイワシ	ブリ類
定置網での漁獲割合(%)	7.8	11.1	16.6	0.3	12.0	23.4	9.3	40.7

2-3. ブリ類を漁獲する漁業②

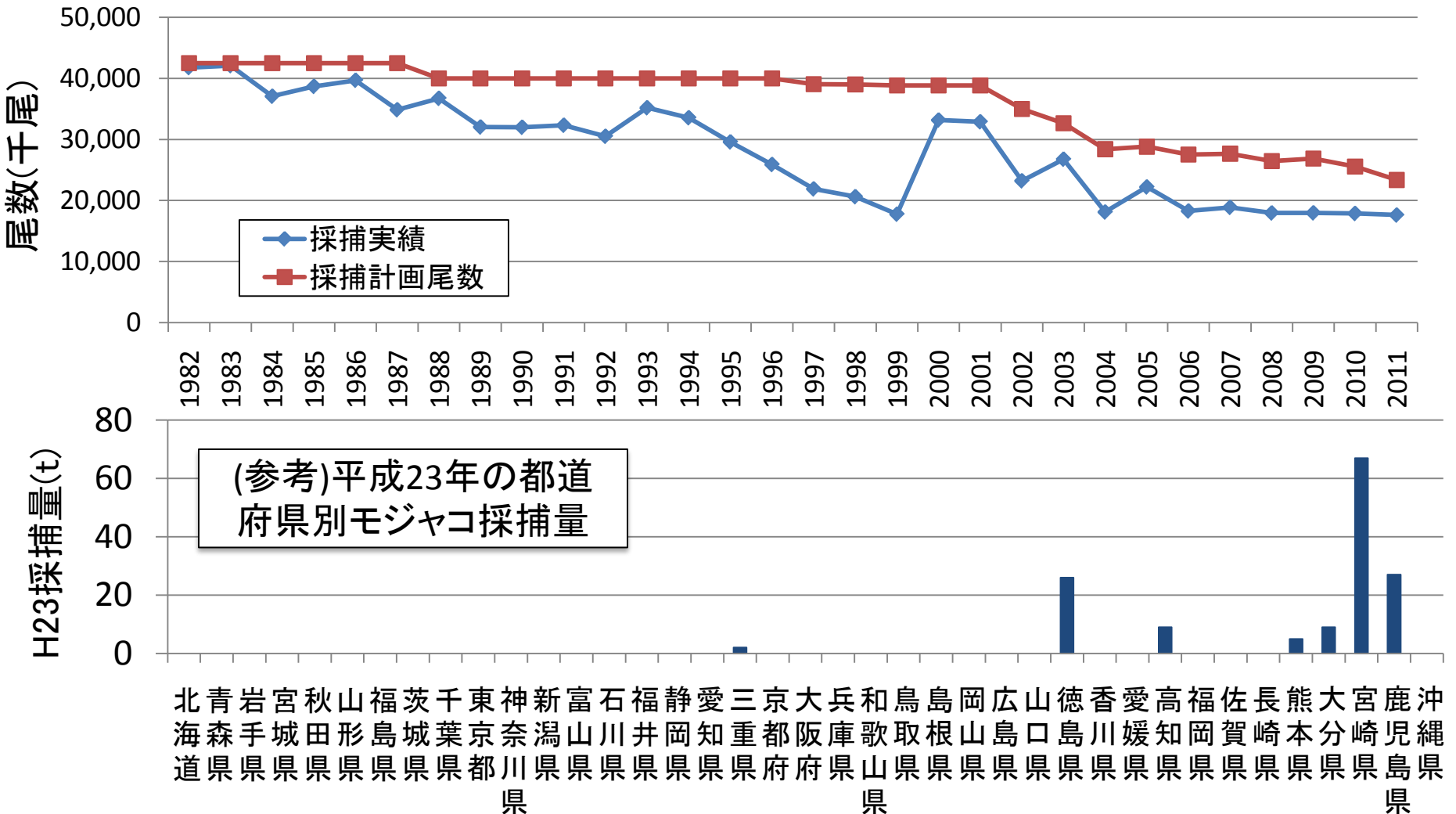
○ 大中型まき網と、大型定置網の漁獲量が増加している。



2-4. モジャコ採捕量

○ ハマチ養殖に供するため、関係県が策定する採捕計画に基づき、稚魚（モジャコ）が採捕されている。

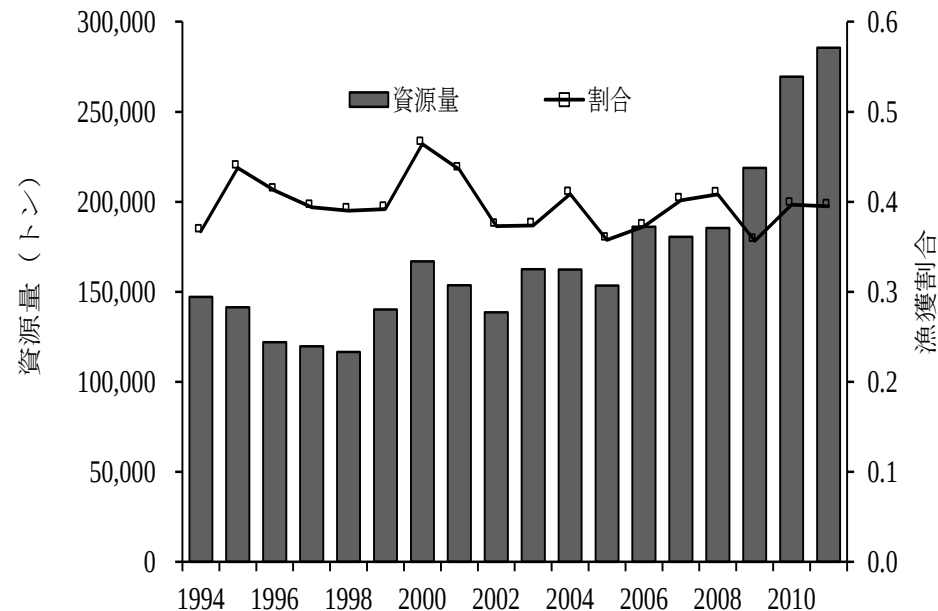
○ モジャコ採捕尾数は減少傾向にある。



3-1. ブリの資源動向等①

○ 水準・動向等

- ・ブリ類の資源は近年の加入が良好でこれまでで最も高い水準にある。水準は高位、動向は増加と判断される。近年、北海道で多獲されるなど、生息域が拡大。
- ・資源量増加の要因としては、海水温の上昇が考えられる。

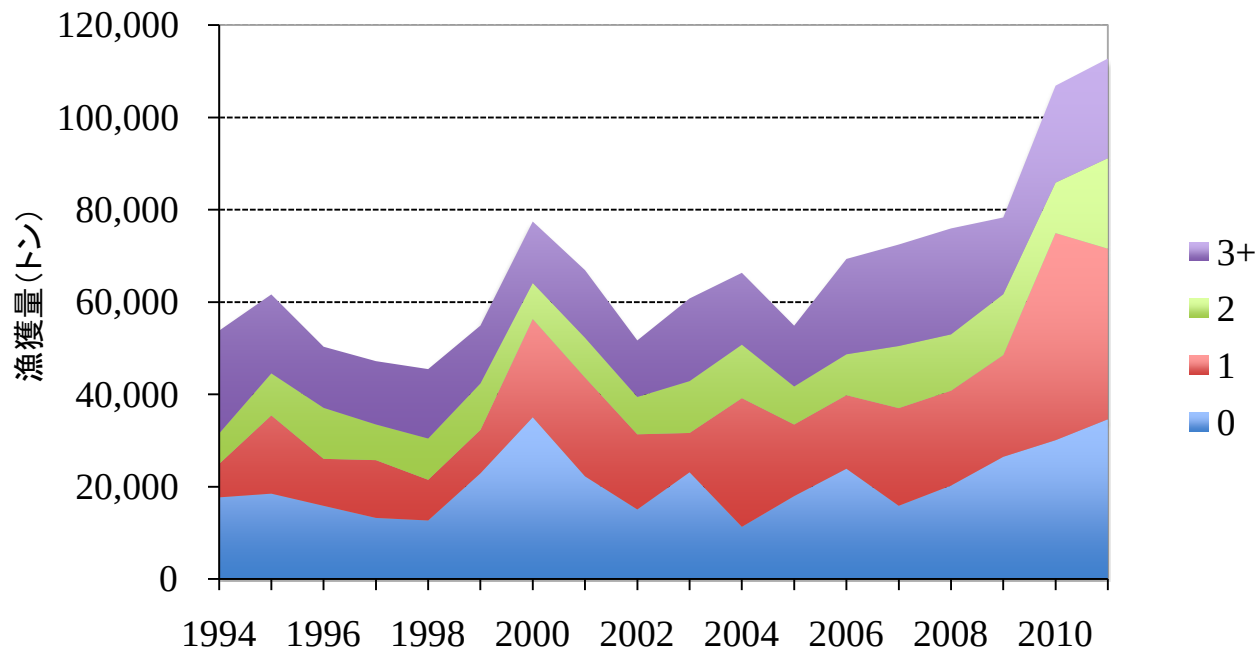


資源量と漁獲割合の推移

3-2. ブリの資源動向等②

○ 漁獲との関係

- ・稚魚(モジャコ)から成魚(3歳以上)まで漁獲の対象となっている。近年のモジャコ採捕は資源に影響を与えるほどのものではない模様。
- ・現在は資源に対して過大にならない水準で漁獲が行われているが、将来的に海洋環境が変化した際には注意を要する。



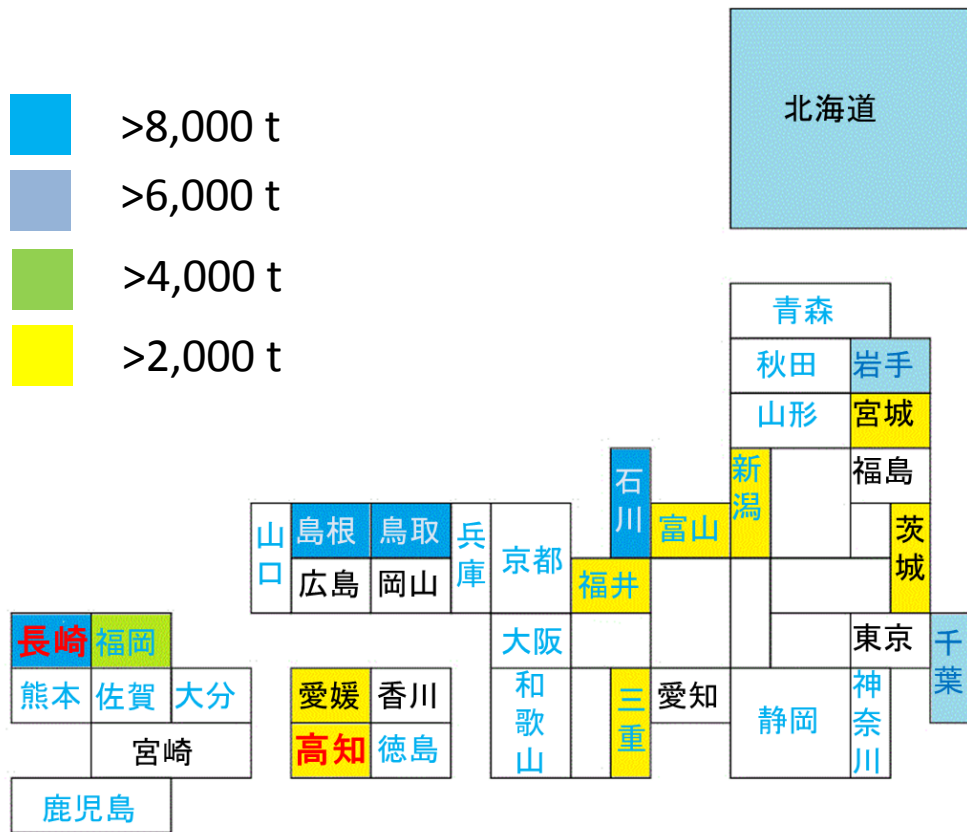
全国の全漁業における年齢別漁獲量

(参考) 年齢と体サイズ、重量

0歳魚(約40cm、1kg)、1歳魚(約60cm、3.5kg)
2歳魚(約75cm、7kg)、3歳以上(約80cm、9kg)

4. ブリの資源管理の取組み状況

- 国の資源管理指針:ブリの資源管理について定めていない。
- 都道府県の資源管理指針:漁獲のある39都道府県のうち、ブリを魚種別資源管理の対象としているのは高知県及び長崎県の2県。漁業種類別資源管理の対象としているのは、青森県、岩手県など28県。



資源管理指針に
定められた管理
措置

定置網	操業期間制限 休漁設定 漁具制限
釣り	休漁設定
まき網	休漁設定

沖繩

図中の色は、漁獲量の水準を示す
都道府県が定めた資源管理指針においてブリを魚種別資源管理の対象としている場合、**赤字**、
漁業種類別資源管理の対象としている場合、**青字**で表示。

5. これまでのまとめ

- ブリ類の資源は近年の加入状況が良好で、これまでで最も高い水準にある。水準は高位、動向は増加と判断される。
- 定置網漁業による漁獲が40%を占める。その漁獲のほとんどが定置網漁業で行われている県が少なくない。
- 現在は資源に対して過大にならない水準で漁獲が行われているが、将来的に海洋環境が変化した際には注意を要する。
- 現在、都道府県別に個別に資源管理に取り組んでいるが、広域的な資源管理の取り組みは特にない。